

Appeal Your Opinion!

令和7年度

第47回 中学生の主張 富山県大会 発表文集

期日 令和7年8月8日(金)

会場 パレブラン高志会館



第47回 中学生の主張富山県大会



青少年育成富山県民会議

月第三日曜日は「とやま県民家庭の日」
とやま県民家庭の日から始まる一週間は
とやま家族ふれあいウィーク

伸びよう 伸ばそう 青少年



目 次

はじめに 青少年育成富山県民会議会長 神川 康子 … 1

中学生の主張

最優秀賞

家族とは 高岡市立志貴野中学校 3年 山口 愛茉 … 2

☆第47回少年の主張全国大会—わたしの主張2025— 推薦

国立青少年教育振興機構努力賞受賞

審査委員特別賞

想いを風にのせて 富山市立呉羽中学校 2年 大谷 遥香 … 4

日常の尊さ 高岡市立牧野中学校 3年 中澤 莉聖 … 6

優秀賞

透明な絵の具 魚津市立東部中学校 3年 大島 幸奈 … 8

災害への対応で大切なこと 滑川市立滑川中学校 3年 宝田 遥叶 … 10

言葉によるいじりといじめ 射水市立小杉中学校 3年 森永 知香 … 12

自分の声を取り戻すために 高岡市立志貴野中学校 3年 岩崎日向子 … 14

なりたい自分になるために 砺波市立出町中学校 3年 前花 風香 … 16

しなやかに、自然体 南砺市立平中学校 3年 山下 桃代 … 18

自分自身と向き合う 南砺市立平中学校 2年 坂本 桜香 … 20

講 評 審査委員長 富山新聞社副代表報道局長 宮本 南吉 …… 22

第47回「中学生の主張富山県大会」主張概要 …… 24

第47回「中学生の主張富山県大会」開催要綱 …… 26

第47回「中学生の主張富山県大会」主張文募集要領 …… 27

審査委員 …… 29

はじめに

「中学生の主張富山県大会」は、1979年の国際児童年を契機として始められ、今年で47回を数えます。

この大会は、中学生が日頃、学校や家庭、地域社会の中で、考えていることや感銘を受けたこと、あるいは将来の夢や社会に対する希望などを自分自身の言葉でまとめ、それを広く県民に発表することで、より多くの大人に今の中学生を理解してもらうとともに、同世代の若い人たちに自分自身の生き方を考えてもらうことをねらいとして実施しているものです。

今回は、県内各中学校から、1,166点の応募がありました。その内容は、学校や家庭、地域などにおける様々な経験を通して学んだり考えたりしたことをもとに、困難を乗り越える強い思い、コミュニケーションの大切さ、さらには家族の絆や生命の大切さなど、広範多岐にわたるものでした。

その中から、各市町村での選考と作文審査を経て選ばれた10名の中学生が、富山県大会で発表しました。どの発表者も他者とのかかわりや自己の生き方について力強く表現していました。そして、自分の思いを精一杯に主張する姿からは「周囲の人たちの支えや励ましを自分の力にしていきたい」という感謝や未来への確かな歩み、「地域社会に生きる一人として自分にできることをしていきたい」という自覚や責任感、「自分らしく、個性を大切に生きていきたい」という前向きな意欲などがあふれており、一人一人の発表が心に残るものとなりました。

この文集をお読みになる大人の方々には、中学生の前向きな主張を真摯に受け止め、彼らに対する理解をより深めていただくとともに、今後とも温かく励まし見守っていただければ幸いです。また、中学生の皆さんには、この同年代のメッセージを、これからの学校生活に活かしたり、自分自身の生き方を見つめる手がかりにしたりするなど、大いに役立てていただきたいと思います。そして、夢や希望を大切に、自分を向上させるための努力を一層重ねていただければと思います。一人でも多くの方々に彼らの主張をお届けできれば幸いです。

終わりに、本大会の開催にあたり、多大なご協力とご支援をいただきました県内各市町村教育委員会、富山県中学校長会、富山県PTA連合会、関係各位に厚く御礼申しあげます。

令和8年1月

青少年育成富山県民会議

会 長 神 川 康 子

第47回少年の主張全国大会—わたしの主張2025—
国立青少年教育振興機構努力賞受賞

最優秀賞

家族とは

高岡市立志貴野中学校 3年 山口 愛 茉

「お兄ちゃんうざい」「お母さん死ね」

以前は気にも留めなかったのだが、最近こんな話を聞くととても胸が痛む。学校でもこういった会話が頻りに多く、授業参観前日なんて悪口大会だ。また、ネット上でも、「毒親」や「親ガチャ」と称し、こうした書き込みが増えているとニュースで見たことがある。本当に家族はうざいだろうか。本当に死んでほしいと思っているのだろうか。私たちにとって家族とは、一体何なのだろうか。

小学校6年生の夏、父が他界した。

夏休みも残すところわずかとなったある日、私はいつも通り家族の中で一番最後に起きた。普段と変わらない一日のはずだった。母の元に一本の電話がかかってきた。

「父が倒れた」

父は中学校の同級生とハンドボールをしに行っていたはずなのに…。容体などを聞いたかったが、これ以上のことは分からないとのことで、母は「大丈夫だよ」と私たちを安心させ、父のいる病院へ一人で向かった。30分程たっただろうか。母から、父の友達の車で病院に来るように連絡がきた。こんなことは初めてで突然のことだったから、頭の中は真っ白だった。車に乗っている時、父の友達が優しい言葉をたくさんかけてくださったが、私の耳には入ってこなかった。

到着して病院を目の前にすると、真っ白だった頭に「死」という言葉がよぎった。漫画じゃあるまいし、熱中症か何かだろう。そう何度も自分に言い聞かせ、病院の中で待った。10分程過ぎた頃だった。祖父と母がお医者さんに呼ばれた。部屋から出てきた母の姿は今でもはっきり覚えている。12年間、一度も涙を見せなかった母が号泣していた。初めて見た涙の理由が本当は分かっていたが、違うと信じ、知らないふりをして父を待った。母は私たちに、

「パパね、心臓、もう動いてないんだって。」

と、震えた声で告げた。ドッキリなのか、それとも夢なのか現実なのか、私は理解できずにただぼーっと座り込んでいた。しばらくして、姉のすすり泣く声が聞こえてきた。それでやっと我に返った。涙が一粒二粒と、後から後から溢れ出し、みともないくらいに声をあげて泣いた。大きな口を開けてわんわん泣

いた。あの温かく優しくあった父の手は冷たく硬くなっていた。

静まりかえった家に帰った。カレンダーの明日の予定表には、「パパと遊びに行く」と記されてあった。父は確かに生きていた。そして、今も生きてるような気がする。

父が亡くなってから2週間が経つと、悲しむ暇もなくすぐに普通の日々に戻った。「普通」そう思っているのも母のおかげだ。父の葬儀が終わった後、一番辛いはずなのに家族に明るく声をかけ、元気づけてくれた。また、仕事を増やし、母が一人で私たちを養ってくれている。その母の頑張りに気づいたのは、中学校1年生の冬、母の日記を誤って読んでしまったのがきっかけだ。父の命日の日に、「家族は私が支える。パパの分も」大きな力強い字で書いてあったのだ。それからのいろいろな苦勞も書き留めてあった。また、母はあの日以来、涙も、苦しい顔すら私たちにを見せていない。何があっても必ず笑顔で「おかえり」と言ってくれる。私が暴言を吐いた次の日も。部活動に忙しいからと家のことを母に任せっきりにしていた私は最低だ。父の代わりになって、家族の柱になってくれた母の姿に私は気づいていなかったのだ。

私はこの日から母の負担を半分、いや3分の1も減らせないかもしれないが、母がしている家事や妹の世話などを毎日することにした。大変で嫌になる日もある。けれどもこの決断を後悔した日はない。また最近、妹も家事を手伝ってくれて、私の負担も半分になった。家族とは、何も言わなくても互いに気遣い、こうして支え合うものなのだと心の底から思った。

「お父さんへ。そっちで元気にやっていますか。私は、たまに寂しくなって一人で泣くことがあります。けれども、心配しないでね。もうすぐ私は、高校生になります。お姉ちゃんらしく、お母さんを、家族をしっかりサポートしていくのでずっと見守っていてね。」



審査委員特別賞

想いを風にのせて

富山市立呉羽中学校 2年 大谷 遥香

あたり前のように生きているこの瞬間。しかし、今があるのは奇跡のようなことで、ありがたいことです。だから、私は急速に発展する社会に対し「大切な人に感謝を伝えること、あたり前を大切にすること」を提案します。私がこのことを提案しようと思った理由は、ある番組のドキュメンタリーで「風の電話」という存在を知ったからです。

風の電話は、岩手県上閉伊郡大槌町の海が見える高台にある電話ボックスです。ここには、東日本大震災で連絡がとれなくなった人や亡くなった人に想いを伝えようと沢山の人々が訪れます。ここにあるダイヤル式の黒電話は線が繋がっていません。自分の想いを風にのせて伝えるのです。風の電話では、受話器の向こうから相手の声はきこえないと分かっているにもかかわらず、愛する人に想いを伝えようと人々は語りかけていました。ドキュメンタリーで見た人々以外にも今も家族や大切な人を想っている人が大勢いるという事実を、胸を打たれました。私のそばでは、父と兄もその番組を観ていました。手を伸ばせばすぐに届くほど今は近くにいるけれど、このあたり前はいつまでも続くわけではないのかもしれない、そう思い、つい父と兄に視線を向けてしまいました。視線の先には、いつも通りの様子の2人がいました。そのいつも通りの景色に私は胸をなでおろしました。私にとってのあたり前、それは家族や友人が元気に笑っていることです。しかし、命はいつまでもあるものではなく、私が想っているあたり前もあたり前ではないのかもしれないと思うようになりました。

私は大切な人と過ごす、かけがえのない時間を守りたいです。だから、ある2つのことを重要視しました。1つ目は、防災意識を高め自分のできる形で復興に参加するということです。日頃から万が一に備え、防災リュックを用意したり避難場所を家族と話し合ったりすることが必要だと思います。また、被災地への募金やボランティア活動などに参加することで過去の出来事から目をそらさず、より災害に強い社会をつくることができると思います。2つ目は、日

頃から大切な人や周りの人に感謝を伝え、当たり前だと思っている日常を大切にすることです。この提案は、大切な人がそばにいなくなっても後悔しないようにするためのものではなく、災害に向き合うためだけのものでもありません。これは、人生の中で人のあたたかさを知ったり、今を大切にしたりするための提案でもあります。この世の中は急速に発展し、新しい考えや価値観も、生み出されます。そんな日々の中でも人のあたたかさや日常のありがたさを忘れないことが大切だと思います。

最後に、私が今挑戦しようとしていることを紹介します。1つは、能登半島地震の被災地のボランティアに参加すること、もう1つは将来の夢についてです。私は、昨年能登半島地震の募金に参加しました。だから、今年はボランティア活動に参加したいと考えています。次に、将来の夢についてです。私は将来、災害救助犬を育てる人になりたいです。そのために、今は仕事についてや必要なスキルについてもっと知識を増やしたいと思っています。私にできることは限られているけれど、考えた提案を日々実践しできることを増やしていきたいです。

そして、今よりも災害に向き合える、自分に向き合えるような世の中を目指していきたいです。大きなことを実現させるためには、大勢の力が必要です。一步一步を着実に歩み、感謝を忘れなければきっと明日という明るい日が待っていると思います。私の提案も、風の電話のように風にのせてもっと広めていきたいです。



審査委員特別賞

日常の尊さ

高岡市立牧野中学校 3年 中 澤 莉 聖

「ただいま。」

普段なら「おかえり。」と明るい声が返ってくる。母が夕飯の支度をしていて、父はまだ帰宅していない時間だ。だが、その日は違っていた。両親と祖母が、深刻な表情で話し込んでいた。えっ、何？ どうしたの？ ただならぬ雰囲気を感じた。

「ママさ、乳がんになってしまったの。」

泣きはらしたような母の顔があった。よく理解できないまま、「そうなんだ。」と返事をした。

その日から、家族の日常が急変した。仕事も家事も、てきぱきとこなしていた母だったが、口数が減り笑顔も少なくなった。父は黙って家事を手伝うようになった。姉や私も、自分ができるところをやり、母に無理をさせないように心がけた。1か月後の手術の日まで、風邪などをうつしてはいけないと体調にも気を配った。

しかし、心の中では不安が渦巻いていた。母はこの先どうなるのだろうか？ 手術でがんは完全になくなるのかな？ もしかして、もう一緒にいられなくなるの？ 生まれて初めて身近にいる人がいなくなるかもしれないという恐ろしい気持ちに襲われていた。がん患者の闘病の様子や余命宣告についてテレビで見たことがある。でも、それは他人事で、まさか身内で起こるなんて考えもしなかった。

私は、こっそり「がん」について調べた。乳がんにはいくつかの種類があり、手術の方法や治療法がいろいろあること、進行段階によってできない治療があることなどを知った。また、手術が成功しても、転移や再発の可能性があるし、安心できるまでには長い歳月を要する病気だということも分かった。調べれば調べるほど多くの情報が出てきて、ますます怖くなってしまった。

そんなとき、母や家族との思い出が、次々によみがえってきた。あの頃に戻りたいと強く思った。同時に後悔の念に駆られていた。最近の私は、自分の好きなことばかりに時間を費やして、家族との時間を煩わしく感じていた。「久

しぶりにみんなで出かけよう。」と言った父の言葉に、耳を傾ければよかった。母が作るおいしいごはんを、もっとしっかり味わっていればよかった。…私はたくさんのことを悔やんだ。不安や後悔で押しつぶされそうだった。手術がうまくいって母が元気になってほしいと、祈るような気持ちで一日一日を過ごした。

母は手術を終え、順調に退院の日を迎えることができた。退院後も、しばらく仕事を休みリハビリを頑張っていた。その後の検査で、がんの転移は確認されず、恐れていた抗がん剤治療もしなくて済んだ。それでも、長年にわたってホルモン治療と定期的な検診を受けなければならない。母は、治療に伴う様々な副作用と共に今後の人生を送っていくことになる。少しでも以前のような日常に近付けるよう、家族みんなで前進していきたいと思う。

母は最近よくこう言う。

「生きているだけで幸せ、家族と過ごす日常があれば十分。」と。

私は母の気持ちが身に染みて分かる。今の私たち家族には、4人そろって無事に暮らせること、それが何よりも大切で感謝すべきことだ。これまでは、日常の幸せに目を向けるどころか、同じように繰り返される日々がつまらないと感じ、平凡な暮らしに物足りなささえ感じていた。でも、その日常こそが、とてもかけがえのないものだ気付いた。家族そろって食卓を囲むこと、ご飯をおいしく食べられること、元気に学校へ通えること、何気ない全てに感謝をしていきたい。

誰にでもある日常の一つ一つが、何よりも尊く感謝すべきものだということ、それが一番の幸せだということ、私たちは決して忘れてはいけない。



優 秀 賞

透明な絵の具

魚津市立東部中学校 3年 大 島 幸 奈

「それって我儘だよな……。」
「ここはもっとぼかしてさ……。」

私の色はどこ？
同じ色じゃいけないの？

最近、個性が認められるようになってきた。誰もが各々の色を輝かせながら生きている。そんな個性派社会。学校も社会であり、一人一人が自由に過ごしている。

しかし、未だ全ての個性は認められない。同じ色にされて、違う色は異端。そうやってきたのに、社会に出れば今度は個性を求められる。

大事なことは、教えてくれない。そんな社会で、どうやって生きていこう。

自分の考えだって個性だ。道徳や国語は自由に思いを表現できる。音楽や美術だって、感じ方は人それぞれ。それが良さでもあるだろう。

けれど、とある社会は違うように感じる。少数派は切り捨て対象。それにおびえて、自分の色を隠していく。自分の色を出せるのはほんの一握り。

実際、自分の考えに対して反対の意を示されたことがある。言ってしまうと、たかだそれだけ。自分が一番正しいなどとは思っていない。けれど、内心驚いた。

たとえば、誰かを助けるとき、「善意はなく行動だけ」と「善意はあるが動けない」。高い評価を得るのはどちらだろうか。きっと、行動する人を評価するだろう。内面の意思は自分しか知らない。だから、気持ちだけでは評価できない。

だが、私はその意思を評価したいと思った。「助けたい」と思ったその気持ちは、きっと相手に伝わると思うから。

内面が評価されないこと。改善するのは難しいことだとわかっている。気持ちなんて軽々とひっくり返るものだから。そんな評価の仕方について話していたとき、

「内面の評価を得るってさ、結構我儘だよな。」 「だね。」

そんな言葉が聞こえた。

思っていたのと違う反応で驚いてしまった。そこで初めて、自分が少数派にいることに気付いた。後になって思い返せば、自分自身も無意識に相手の色を思い込んでしまっていた。

意見が合わないのは日常茶飯事。とはいえ、その意思を強要するのはまた別である。

部活で水彩画を描いていた時、私は花と水の絵に色を付けていた。真っ青な水の上に白い花が咲いている絵。透明感を出したくて、はっきりとした光を入れたことを覚えている。気づけば先生に筆をとられていた。

「ここはもっと薄くぼかしたほうがいいよ。」

そうやって、私が入れた光は消えてしまった。私の絵なんだから、私に直させてほしい。思っても、言えず。何度も直して、また消された。いっそ折れてもよかったが、自分の絵であることを忘れなくなかった。

また別の絵。黒い線に赤が映える絵を描いた。また何か言われるのだろうか。的中。

水墨画のようだと笑われた。言いなりばかりじゃ、嫌だ。自分の色を出して、話して。目上の人言葉で全てが決まり、全てが覆る。落ちてしまえば戻らない。だから、自分を守ってしまう。色が、変わる。本音など殺して。

言葉にできない私が悪い。先ほどの話と同じだ。けれど、押し付けられたようだった。

「色を塗り替えて」しまった。うまく色を扱えず、自分の色がわからなくなった。このまま、何色にも染まれなくなりそうだ。

自分の「色」は、「考え」は、「個性」は、「才能」は何なのだろう。色が無いなら着飾っていろいろな色をまよえばいい。一色でも、二色でも、自分の色を貫き通せばいい。

私には、自分の何が武器なのか、何を誇ればいいのか分からない。けれど、考えをもつことはできる。自分の考えを言葉にして、色をつけて、形にして、何色かわからない私の色が、誰かに届いたなら。

「異端」の色は、誰もがもっている。似た色は作れても、全く同じ色は作れないように。皆が異端で、皆が普通。それが「個性」と呼ばれるものだと、私は思う。

だからどうか、あなたの色を、見せて、聴かせて、誇ってほしい。色をぶつけあって、新しい色を作りたい。私はうまく色を使えず、何度も間違ってしまった。だから、今度こそ。

大事なことは、教えてくれない。自分で学んでいくしかない。学んだ先はきっと、それぞれの色で違うだろう。

私の色は、分からない。だから形にしてみたい。パズルのような私の言葉を見て、何色が見えましたか。何も見えなくなっていていい。それが、私の色だから。願わくは、何色にだってなれる、「透明」でありたい。

あなたの色は、何色ですか。



優 秀 賞

災害への対応で大切なこと

滑川市立滑川中学校 3年 宝 田 遥 叶

2014年1月1日。能登半島大震災。

私は、ショッピングモールのエレベーターから降りたところでした。両足に伝わる地震の強い揺れと、スマートフォンから鳴り響く緊急地震速報。いつもの日常とは違う現実に怯えていました。

最大震度5強を観測した富山県。「台風や地震からは、立山が護ってくれる」という神話も、終わりを迎えようとしています。

私はこの能登半島大震災を機に、民間資格の「防災士」を取得しました。この資格を取得するには、2日間の講習と普通救命講習を受け、最後にマーク式の試験に合格しなければなりません。私は、講習を受け、考えたことがあります。それは、一人一人が災害に対する備えを今以上に強化していくことが大切だということです。

例えば、「防災リュック」。ある調査では防災リュックの所持率は53パーセントと、半分程度の人しか所持していないという結果となりました。

支援物資は、地震が発生してからすぐに避難所に届けられるわけではありません。地震の規模や交通状況によって違いますが、1日から4日程度で届くと言われています。実際、能登半島大震災では、地震が発生してから2日後の1月3日に、穴水町や輪島市に支援物資が到着したと内閣府の報告にあります。それでも、全ての避難所に支援物資が届いたわけではありません。

支援物資が届くまでの間は、個人や各自治体の備蓄で過ごさなければなりません。当たり前ですが、自治体の備蓄には限りがあります。大人数で備蓄品を取り合うと、すぐになくなってしまい、支援物資が来るまでの生活をしのぐことができません。そうなると、避難者同士で対立し、ストレスが増加して、落ち着いて生活することはできないでしょう。だからこそ、一人一人が防災リュックを準備し、災害に対する備えを強化する必要があると思います。

その他にも、毎年9月1日に行われる「シェイクアウト訓練」。2024年の富山県民の参加人数は、162,083人でした。富山県の人口は、2024年9月1日時点で、996,720人なので、約16パーセントの富山県民が訓練に参加したことにな

ります。シェイクアウト訓練は、素早い安全確保や防災意識の向上に効果があります。特に、地震発生後に素早く自分の身を守ることはとても重要です。ですが、県民の8割はこの訓練に参加していません、訓練していない人が、急に起こった地震に対応できるでしょうか。訓練に参加すれば、個人の備えを強化することができます。できないことをできるようにするためにも、全富山県民、ひいては47都道府県民全員でシェイクアウト訓練に参加することが大切だと思います。

さらに、もう一つ大切だと思うことがあります。それは、「地域のコミュニティ」です。地域のコミュニティは、災害時に役立ちます。一見、関係がないように思えますが、災害発生直後に力を発揮するのは、普段の地域のコミュニティ力だと思います。普段から、子どもからお年寄りまでが仲良く話をし、互いに顔なじみの地域は、災害時でも協力し合えると思います。だから、普段から地域の行事に参加したり、ご近所付き合いを大切にしたりしていくことが必要だと感じました。

私が提言したいこと。1つ目、防災リュックの準備やシェイクアウト訓練に参加するなどの、一人一人の災害に対する備えを強化する「自助」。2つ目、災害時に助け合える地域コミュニティを構築する「共助」。一人一人の防災意識を高め、被害を想定し行動する。このことが、災害大国日本で生き残るために必要なことではないでしょうか。



優 秀 賞

言葉によるいじりといじめ

射水市立小杉中学校 3年 森 永 知 香

いじりやいじめについて考えたことはありますか。自分がその境界線に立っているかもしれないと考えたことはないですか。普段から何気なく使っている言葉は、相手にとってトゲのあるものかもしれない…、そんなことを考える人は少ないかもしれません。私は、それについて、自分の体験から考えたことがあります。

小学校3年生の時、先生に言われました。「森永さんは正しいことを言っているんだけど、人を傷つけてしまっている場合がありますよ」と。衝撃でした。そんなつもりは、全くなかったからです。ただ、この時はまだ、言われたことの意味を本当には理解していませんでした。私が、言葉について考えるようになったのは、4年生の後半辺りからだったと思います。「いじめ」という言葉を耳にするようになり、かつて先生に言われたことを思い出しました。言葉を発する時は無自覚です。だからこそ、もし、私の言葉によって傷つく人がいたら、それによって嫌われていたら、そう考えると不安になりました。また、自分にそんなつもりはなくても、相手がどう捉えるかによって違ってくことも怖いと思いました。そして、「正しいことを言っているけど、言葉は無自覚のうちに相手にはトゲのあるものになってしまう」ということの意味が分かるようになりました。私は、自分の言葉には責任をもつべきだと思いました。「クズ、死ね、カス」など、ナイフで心を刺すような言葉を、平気で言う人がいますが、こんな言葉は、使った時点で私はいじめだと思います。ユーチューバーが使っているから、友達が使っているからいいだろうと思っているようですが、こんな言葉を言われて平気な人はいません。いじめが起こる一因は、簡単に言葉を発してしまうところにあると思います。

私は中学校2年生の時、生徒会の一員としてよりよい学校づくりに取り組み、活動の一つとして人権集会を行いました。テーマは、「いじりといじめについ

て」でした。全校生徒に分かりやすく、身近なこととして考えてもらうために劇をしたのですが、その劇の内容を考えるのはとても難しかったです。それは、いじりといじめの境界線が分からなかったからです。いじりのつもりでも、一歩間違えばいじめになり得る内容になってしまいます。私たちは、第三者の視点から、いじめかいじりかは相手がどう受け止めるかで判断されるということを伝えました。この活動を通して、いじりといじめの境界線は難しいと改めて感じました。同時に、自分の言葉も見直さなければならないと思いました。すべての人に自分の言葉を振り返ってみてほしいです。

言葉は人と人とのコミュニケーションを広げ、世界を豊かにできます。また、人を喜ばせることもできます。一方で、言葉一つで相手を悲しませることもなってしまいます。言葉とは奥が深いものです。だからこそ、言葉を使う前に立ち止まって考えてほしいのです。その言葉を発してよいか、相手にとってトゲのあるものではないかと。自分が言いたいことを、何も考えずに口にするのではなく、一度相手の立場に立ってみてほしいと思います。私は、身近なことから言葉について考えることで、また、そういう人が増えることで、いじめがなくなればよいと強く願っています。それだけで、世界はもっとやさしく、素敵になると思います。



優 秀 賞

自分の声を取り戻すために

高岡市立志貴野中学校 3年 岩 崎 日向子

ある日、私はSNSを見ながら、ため息をついていました。おしゃれな服を着こなす学生たち、美しく整えられた部屋、そこにはキラキラと輝く夢のような毎日が映し出されています。それを見たとき、私はふと自分の生活と比べてしまいました。私は一体何をしているのだろう。なんとなく一日を過ごし、やるべきこともしてない。どんどん自分に自信がなくなっていったのを覚えています。

動画を見続けているうちに、気付けば一日が終わっていたこともありました。家族の話もちゃんと聞かず、上の空で返事をしてしまったり、思わぬことで喧嘩になったりすることもありました。それでも私はスマートフォンを手放すことができませんでした。本当はこんな自分が嫌で、苦しくて抜け出したかったのに、どうすればよいのか分からなかったのです。

そんな時、「SNSデトックス」という言葉が目に入りました。いつも見ていた「完璧な大人たち」の中に、スマートフォンを手放しすっきりした生活をしている人がいたのです。「私もこんなふうにできるかな」と半信半疑でしたが、ちょうど意味もなく動画を見続けている自分がだんだんばからしく思えてきた時だったので、前に進むきっかけになりました。

SNSを見なくなって最初に感じたのは、「静けさ」でした。誰かのストーリーも、通知もない。けれどもその静けさの中で、ようやく自分自身の声に耳を傾けられるようになったのです。夜にスマートフォンを見なくなってから、ぐっすり眠れるようになり、あんなに辛かった頭痛も減りました。そんな体調面以上に大きかったのは、人との関わりの変化です。家族と過ごす時間の中で、今まで感じられなかった「本当の意味での会話」が増えました。ただ聞いているふりではなく、相手の言葉をきちんと受け止め、伝え返す。そんなやりとりが自然とできるようになっていました。「話すってこんなに楽しいことだった

んだ」と改めて感じたのです。SNSを手放したことで、私は、今この瞬間に目を向けられるようになった気がします。

ある日、私はこんな言葉に出会いました。「SNSは、見せたい自分で生きる場所。だからこそ、本当の自分が苦しくならないように、使い方を選ぼう」その言葉が、私の心に深く響きました。私は、SNSの中で、「見せたい自分」になろうとしていました。けれども、本当の自分はその中にはいなかったのだと思います。SNSが悪いわけではありません。私が自分を守る方法を知らなかったのです。

今の時代、私たちにとってSNSはなくてはならないものです。けれどもその一方で、SNSの世界に支配されて自分を見失ったり苦しさを抱えたりしている人も少なくはありません。SNSは、使い方次第なので、時には勇気をくれ、背中を押してくれることもあるでしょう。また、人生を変えるきっかけになることもあるでしょう。だからこそ私は、これからもSNSと付き合いながら、自分を大切にできる使い方をしっかり選んでいきたいと考えています。

スマホを閉じたその先に、自分自身と向き合える大切な、大切な時間があります。もし今、「しんどいな」「疲れたな」と感じる人がいたら、ほんの少しだけでもスマートフォンから離れてみてください。そして、心の声に耳をすませてみませんか。きっとその先には、今よりもっと素敵な世界が広がっているはずです。



優 秀 賞

なりたい自分になるために

砺波市立出町中学校 3年 前 花 風 香

「なりたい自分になることを諦めないで」私を救ってくれたこの言葉は、今も心の中できらきらと輝いています。

中学2年の夏のこと。私は「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」で総合病院を訪れました。看護師になることが夢だった私は、「人と関わって、人を助ける看護師になりたい」という思いで、この場所を選びました。

私たちは病院の見学や業務の補助など、いろいろな体験をさせていただきました。その中で特に印象に残ったのは、看護師さんたちの、前向きで気遣いにあふれる仕事への姿勢です。

1日目。人生で初めてナースステーションに足を踏み入れた私は、生き生きと働く看護師さんたちの様子にくぎ付けでした。ものすごいスピードで、数々のタスクをこなすなんて、本当にかっこいい！ドキドキしながら、10年後の自分を想像してしまいました。憧れの職場だ。絶対に看護師になりたい！

ところが3日目。予想外の出来事が起こりました。「採血を見せてあげる。」そう言われ、看護師さんについて病室に向かいました。採血は、看護師にとって基本的な、避けては通れない重要な仕事です。貴重な機会だ。しっかり目に焼き付けなければ。しかし、実際に患者さんの腕から血が抜かれていく様子を見た私は、途中で気分が悪くなってしまったのです。看護師さんに支えられ、近くの椅子に座り込む私。どうしよう。血を見ただけで気持ち悪くなってしまうなんて。こんなことでは看護師になれないのではないか。勉強をしても、無駄なのではないか。絶望的な気持ちで、私はしばらく考え込んでしまいました。すると、そこに、担当の看護師さんが現れ、こう言ってくださったのです。「看護師の中にも採血が苦手な人はたくさんいるし、私だって最初はそうだったよ。だから大丈夫。なりたい自分になることを諦めないで」と。私は、血が苦手だったという言葉に驚きながらも、続けて看護師さんの話に耳を傾けました。血が苦手でも、訓練すれば慣れること。学生の間にはたくさん練習をさ

せてもらえることなど。採血が苦手でも看護師を目指していいんだ。希望の光でした。そして、中学生の私にも、こんなに温かい言葉をくださったことにとても感動しました。あの時の言葉は、私は一生忘れません。それからの私は、より一層真剣に活動に取り組みました。看護師さんたちを観察していると、患者さんに、その時々で適切な励ましの声かけをされていることが分かりました。

また、病棟には看護師さんだけでなく、清掃スタッフさん、管理栄養士さんなど、見えないところで数えきれないほど多くの方々がサポートしていらっしゃることを目のあたりにしました。私は、病院は誰かひとりだけではなく、様々な人の支えがあるおかげで成り立っているのだと改めて実感しました。このことは、病院だけの話ではありません。社会全体が、お互いに支え合って成り立っているのだと気付くことができました。今までは、お金をもらって、自立して幸せになるために働くのだと思っていました。それが社会に出ることだと。でも、自分の仕事だけでなく、人のために行動し支え合って、皆で幸せになってこそ、社会の一員になったと言えるのではないか。そう考えるようになりました。励ましてくださった看護師さんや、見えないところで働いていらっしゃる方々のように、私も将来、人を救って幸せにしてあげられる人になりたいと思います。苦しいこと、悩むことがこれからたくさんあるでしょう。しかし、「なりたい自分になることを諦めないで」という言葉を胸に、私はこれからも夢を追っていきます。



優 秀 賞

しなやかに、自然体

南砺市立平中学校 3年 山下 桃代

自分の中に、無意識に人を差別してしまっている部分はないでしょうか。人権を守れていないようなことはないでしょうか。「障がい」と共に生きている方を見るとき、私は自分の中にある、障がいを持つ方への接し方と向き合い、それが正しいかどうかを考えることになるのです。

出かけた先で障がいを持つ方を見かけたら、視線の送り先にとまどってしまふことが、私にはよくありました。車いすであったり、白杖であったり、わかりやすい方は特に目に入ってしまう。「あの人は障がいをもっているのか。この道は大丈夫なのかな」などと心配に思うとともに、いくら心配だからとはいえ、見られている方は視線が気になってしまうかもしれない。集中して見すぎると視線が気になり、不快な気持ちを生んでしまうかもしれないと考え、他のところに視線を送ることが多かったように思います。

日ごろの生活で障がいを持っていない方を見かけても、私は特に「心配」を感じません。それよりも、顔立ちや服装、容姿やファッションについて気になることが多いです。障がいのある、なしで対応を変えるこの考え方は、あまりよくないのではないかと自覚しています。だからといって、障がいを持つ方に対して障がいを持たない方と同じように考えるというのも何か違う気もしています。

関心を持つのも無関心なのも、なんとも居心地が悪い。そういう風を感じていた私ですが、今年になって考え方を考える出来事が起こりました。それは、車いすを使う下級生の入学でした。入学式の準備や予行演習をする中で、どのように配慮をすればよいかずいぶんと考えたり、対面式の進行について考えたりもしましたが、そうするうちにだんだんと慣れてきたような気がします。

「これは出来ないだろう。危険だろう」と周囲が予測し、対策を立てることも必要ですが、必要以上に行動することによって、かえって人権を守れていないこともあるのではないかと思うようになりました。

身近な例ではありませんが、ネットなどに寄せられた意見を見ると、このような行動によって「自分のできることまで取り上げられてしまった」「不快に感じた」「逆に困った」などの声が聞こえてきました。その人達にとっては、「周りの人が勝手に予測し、行動され不快な気持ちになってしまった」という

ことになったかもしれません。

障がいを持つ方の本当の気持ちは、その方自身以外には理解することはできない。それは人間がもつ同じ思いだと思います。無理に気を使いすぎると、かえってぎこちなくなってしまうことがあります。しなやかに、自然体で接することが大切だと思うようになりました。

私の学校に入学してきた後輩も、入学したての頃は視線にとまどうようなことも少しあったように思います。しかし、今はそこにそれでいることが普通に感じるし、違和感はいっさいありません。私自身もその子を見かけたら、体調は大丈夫か気かけはするものの、自然な配慮ができています。このように不自由な方が周りになると、それが自然となり、程よい距離感や接し方がわかるようになっていくのだとも思います。

できるだけ障がいに対する理解を深め、理解して障がいに対して考えることが大切だと思うのです。また、どんな人でも、誤解されたり、自分の本当の気持ちが伝わらなかつたりして、不快な思いをしたことがあると思います。ですから、障がいをもつ方がいたら、その人のためにと予測して何か行動を起こす前に、「大丈夫ですか。何かお手伝いが必要ですか。」と一声かけるのがよいではないかと思っています。

障がいについて知り、考えてみることは、「障がい」をもつ方とのよりより接し方へつながる第一歩だと思います。私は、これからも、後輩や今のこの環境から、私の心に生まれた『しなやかに、自然体』の考えを大切に少しでも身近な場所から差別をなくし、人権を守り、全ての人が安心して自分らしく生きられる社会にしたいと思っています。そして、自分を大切に自分らしく「好き」を忘れずに生きていきたいです。



優 秀 賞

自分自身と向き合う

南砺市立平中学校 2年 坂 本 桜 香

「自分自身と向き合う」それは、私が春休みに参加した2つの合宿で学んだことでした。

皆さんは「白銀の鉄人レース」とも呼ばれるクロスカントリースキーを知っていますか。雪山の中を細いスキー板をはいて走り、速さを競う競技です。私は現在、その競技の選手として、日々トレーニングに励んでいます。

今年の冬、正直私は伸び悩んでいました。体力も筋力も競技にかける思いも、ライバルに絶対に負けない自信がありました。それでも勝てない、苦しい時期でした。そんな中、私は多くのオリンピックを指導してきたコーチが広島から指導に来て下さる合宿に参加できることになりました。その講義の中で私に刺さった言葉がありました。JOC強化本部が掲げる「人間力なくして、競技力向上なし」という言葉です。では、「人間力」とは何か、それは「謙虚・礼節・文武両道」だと私は考えました。それら全てが揃ってこそ、人間力が完成しているといえるのではないのでしょうか。

まずは、「謙虚」という観点です。どの競技においてそうですが、選手がいて、コーチがいて、ワックスマンの方々がいて、役員の方々がいて、コース整備をしてくれる方がいて、と数えきれないほどの方々のおかげで競技として成立します。しかし、私自身、自分のことばかりで周りに目を配ることができず、サポートしていただけることへの感謝ができていなかったことに気が付きました。そのため謙虚な行動ができていなかったと反省しました。今後は身近な人や応援して下さる方への感謝の気持ちを大切にしていきたいです。

また、「礼節」です。いつの間にか親しい人との挨拶を疎かにし、礼節が守れていないことにも気が付きました。支えていただく方に感謝するだけでなく、その気持ちを伝えることや自分から誰にでも明るく挨拶をしていきたいと思い、ランニング中に出会う地域の方には率先して挨拶することを心がけました。

最後は「文武両道」です。冬はスキーばかり、テスト期間は勉強ばかりで文武両道ができていないことにも気が付きました。今でも英検や漢検の勉強と部

活、学校の課題と自主練習の両立等に悩んでいます。全てを完璧にこなすことは難しいですが、全てに全力で取り組んでいきたいです。

ここで挙げた3つの観点は、競技結果ばかりを意識していた私にとって、どれも深く考えさせられるものばかりでした。

そう考えた矢先、新潟県で開催された今シーズン最後のレースに参加しました。そこで昨年、中学3年生にして全中優勝、国スポでは中・高生の部を制した長野県の木内選手に出会いました。彼女もこの大会に参加していたのです。彼女は誰よりも優しく、そして誰よりも本気でレースに挑んでいました。彼女の姿を見て、私はやはり速い選手は謙虚・礼節・文武両道ができる選手なのだと確信を持ちました。

2つの合宿を通し、私は目標をたてました。それは強い選手になることです。強い選手とはどのような選手か。自問自答するうちに、勝ち負けだけではないと私は思うようになりました。勝つことに越したことはありませんが、負けてしまっても相手を称えられる人、誰にも平等に接することができる人、どんなことにも嫌な顔ひとつせず、一番に取り組める人、誰よりも真剣で、誰よりも一生懸命で、決しておごることなく、尊敬と感謝を忘れない人、それが強い選手です。

今後も様々な困難があるでしょう。それでも謙虚・礼節・文武両道を胸に、強い選手を目指し、本気でスキーと、そして自分自身と向き合っていきたいです。



講 評

審査委員長

富山新聞社副代表報道局長

宮 本 南 吉

「中学生の主張」の審査を初めて務めさせていただきました。皆さん、それぞれ、日々の生活の中で感じた、さまざま思いや疑問、主張を、素直に誠実に自分なりの言葉で訴えていて、非常に感銘を受けました。一人一人の発表について、審査委員を代表して、講評をさせていただきますと思います。

最優秀賞に選ばれた山口愛菜さん（高岡市立志貴野中学校3年）の「家族とは」は、同世代の若者が家族に対する悪口を言いがちな風潮を取り上げ、「授業参観前日なんて悪口大会だ」といった何気ない学校風景への疑問を出発点にしながら、「家族の大切さ」を考えています。小学6年の時にお父さんが亡くなり、「みっともないくらいに声を上げて泣いた」という重い体験を経て、家族とは、何も言わなくても互いに気遣い、支え合うものなのだ、と「心の底から思った」ことは、とても尊いことです。こうした思いを広げていくことが、今の日本や世界にとって欠かせないことではないでしょうか。

審査委員特別賞となった大谷遥香さん（富山市立呉羽中学校2年）の「想いを風にのせて」は、「防災」に関する主張を繰り広げました。東日本大震災のドキュメンタリーを見ていて、すぐ身近にいる父や兄の存在や、何気ない日常が、実は非常にかけがえのないものであると悟った、その気づきは大きな財産になると思います。「この世の中は急速に発展し、新しい考えや価値観も生み出されます。そんな日々の中にとると、人のあたたかさや日常の大切さを忘れてしまうことがあります」というのは重い警句と言えるでしょう。

同じく審査委員特別賞に選ばれた中澤莉聖さん（高岡市立牧野中学校3年）の「日常の尊さ」は、お母さんが病気になった時の不安や、「家族との時間を煩わしく感じていた」という後悔をもとに、本当に大切なことは、ごく普通の日々の中にあることを訴えました。「家族そろって食卓を囲むこと、ご飯をおいしく食べられること、元気に学校へ通えること、何気ない全てに感謝していきたい」という中澤さんの言葉に深く共感し、ややもすると忘れがちな「日常の尊さ」をかみしめたいと思います。

大島幸奈さん（魚津市立東部中学校3年）の「透明な絵の具」は、若者らしい「自分とは何か？」という問いに、真正面から体当たりしました。多様な価値観を認める「個性派社会」と言いながら、全ての個性は認められない。そんな社会風潮に対する素朴な疑問を、自分の個性を大切にしたい、心に響く言葉で訴えました。「皆が異端で、皆が普通。それが『個性』と呼ばれるものだと、私は思う」との叫びは、胸に迫るものがありました。

宝田遥叶さん（滑川市立滑川中学校3年）の「災害への対応で大切なこと」は、能登半島地震を通じて、防災の大切さを感じたという発表でした。震災を機に、自ら「防災士」の資格を取得した行動力は素晴らしいと思います。一人一人の災害に対する備えを強化する「自助」が大切さであると同時に、災害時に力を発揮するのは普段の地域コミュニティーの力、つまり「共助」であるという主張は、とても大切な意見だと思います。

森永知香さん（射水市立小杉中学校3年）の「言葉によるいじりといじめ」は、「いじり」と「いじめ」という多くの人が身に覚えのある、しかし、実は非常に難しい問題をテーマにしました。森永さんは小学生の時、先生から「正しいことを言っているんだけど人を傷つけてしまっている場合がある」と言われ、衝撃を受けるとともに、大きく成長しました。そうした体験を自分の中できっちり咀嚼し、筋道立てて発表できるのは、見習いたい姿勢だと思います。

岩崎日向子さん（高岡市立志貴野中学校3年）の「自分の声を取り戻すために」は、「SNS」をテーマとしました。動画を見るうちに一日が終わっていた…というのはオトナにとっても、身につまされる話です。そうした中、岩崎さんは「SNSが悪いわけではなく、私が自分を守る方法を知らなかった」という一つの答えにたどり着きました。SNSはあくまで道具であり、使い方次第でプラスにもマイナスにもなるという、冷静な視点は素晴らしいと思います。

前花風香さん（砺波市立出町中学校3年）の「なりたい自分になるために」は、「14歳の挑戦」を通し、将来の目標について考えたことを発表しました。看護師の仕事への真っすぐな憧れと、採血現場を見学した時に体験した心の揺れ（血液を見て気分が悪くなり、看護師に向いていないのでは？と思ったこと）、そして、看護師からの温かな助言で「希望の光」を感じたことを素直な言葉で表現しており、前花さんの内面が成長していく過程がよく分かりました。

山下桃代さん（南砺市立平中学校3年）の「しなやかに、自然体」は、障がいのある人との接し方で、自分の心に揺れ動く部分があったことを誠実に発表しました。障がいのある人への配慮が必要だと思いつつ一方で、配慮しすぎることによって相手が不快に思うかもしれない。そのはざままで揺れていたのですが、車椅子を使う下級生とともに学校生活を送る中で、自然な配慮の大切さへと思い至ったのです。心の成長過程を感じ、自己を見つめ直す大切さを再認識しました。

坂本桜香さん（南砺市立平中学校2年）の「自分自身と向き合う」は、自身が取り組む「クロスカンリースキー」を通し、己の内側を深掘りしていく過程を表現しました。「謙虚」な心と「礼節」を大切に作る姿勢、そして競技結果だけでなく、心身ともに成長することの大切さと、それに気づく過程が、実体験から伝わってきました。スポーツでも勉強でも仕事でも、何かを通して「自問自答する」営みの重要性を学ぶことが大事なのだと気づかされます。

皆さんの発表は、どれも、同世代の仲間たちや、先輩後輩、大人たちも含め、多くの人々の思考を促す刺激になり、それぞれの人が、より良く生きることのきっかけになるものだと思います。きょうの発表を、審査委員の一人として心に刻み、また、一人の人間として成長する機会や、地域社会がより良くなるための一歩に生かしていきたいと思います。

第47回「少年の主張富山県大会」主張概要

| | |
|--------------|---|
| おおしま ゆきな | 魚津市立東部中学校 3年 |
| 大島 幸奈 | 透明な絵の具 |
| 概要 | 最近個性が尊重される社会になってきたが、すべての個性が受け入れられるわけではない。自分の考えや感性が否定される経験を通じて、自分の「色」を見失いそうになることもある。それでも、自分の色を言葉にし、形にして伝えたい。誰もが異なる色を持ち、それが個性であり、誇るべきことだから。互いの色を認め合い、あなたの色を見つけてほしい。 |

| | |
|--------------|--|
| たからだ はると | 滑川市立滑川中学校 3年 |
| 宝田 遥叶 | 災害への対応で大切なこと |
| 概要 | 1月1日の元日に発生し、人々を不安に陥れた「能登半島大震災」。「富山で大きな地震は発生しないだろう」という富山県民の意識を変えた災害でした。私たちは地震に対して、何をすればよいのでしょうか。「災害大国日本」で、どのように立ち回ればよいのでしょうか。能登半島大震災を例に、自分にできること、共に暮らす人々とできることを考えてみました。 |

| | |
|--------------|--|
| おおたに はるか | 富山市立呉羽中学校 2年 |
| 大谷 遥香 | 想いを風にのせて |
| 概要 | 社会の急速な発展により新しい考え方や多様な価値観が生まれる中、家族や友人を大切に思う気持ちは変わらないことに気づいた。そんな中で震災で引き裂かれた家族や友人にとってもまたそれは変わらないのだということを知った。自分にできることは何なのか。考えるだけでなく、形や行動で表すべきことがあるのではないか。今、それを広く、強く、想いを深め、実現するために発信する。 |

| | |
|--------------|---|
| もりなが ちか | 射水市立小杉中学校 3年 |
| 森永 知香 | 言葉によるいじりといじめ |
| 概要 | 言葉は、時に相手にとってトゲのあるものになってしまうことがあるということや、いじりといじめの境界線について考える体験から、自分の言葉には責任をもたなければならないと思うようになった。また、誰もが相手の立場に立って言葉を発するようになれば、いじめのない世界になるのではないかと考える。 |

| | |
|--------------|---|
| なかざわ りせ | 高岡市立牧野中学校 3年 |
| 中澤 莉聖 | 日常の尊さ |
| 概要 | これまでの私は、同じように繰り返される日々がつまらないと感じ、平凡な暮らしに物足りなささえ感じていた。でも、その日常こそが、とてもかけがえのないのだと気付いた。家族そろって食卓を囲むこと、元気に学校に通えること、何気ないすべてに感謝していきたい。 |

| | |
|--------------|---|
| やまぐち えま | 高岡市立志貴野中学校 3年 |
| 山口 愛菜 | 家族とは |
| 概要 | 家族とは、一体何なのでしょう。突然の父の死。あまりにも急すぎて、その事実を受け入れられな いまま、何事もなかったかのように毎日は過ぎ去っていきます。けれども、そんな中、私は改めて気付 きました。父の存在の大きさ、そして家族がいかに互いを思いやり、支え合っているかを。私も、家族 のために何ができるか考えていきたいと思います。 |

| | |
|---------------|--|
| いわさき ひなこ | 高岡市立志貴野中学校 3年 |
| 岩崎 日向子 | 自分の声を取り戻すために |
| 概要 | SNS に夢中になるうちに、私はいつの間にか本当の自分を見失っていました。しかし、スマートフォ ンを手放して気付けたことは、本当の心の声、家族のぬくもり、そして、今という二度と戻れない時間 の大切さでした。SNS が当たり前のこの時代だからこそ、見直してみることで見えてくるかけがえのな いものがある。そう気付いた私の体験をみなさんにも届けたいです。 |

| | |
|--------------|---|
| まえはな ふうか | 砺波市立出町中学校 3年 |
| 前花 風香 | なりたい自分になるために |
| 概要 | 中学2年生の夏に、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」で訪れた総合病院。看護師を目指す私は、やる気 に満ち溢れていました。しかし、採血の現場で気分が悪くなり、落ち込んでしまいます。そんな私に、 温かい言葉をかけてくださった看護師の方々。周囲の支えや現場で働くたくさんの人に触れ、看護師に なりたい、という思いが一層確かなものとなります。また、社会で働く人々の存在に気づき、働くこと の意味を知るのでした。 |

| | |
|--------------|---|
| やました ももよ | 南砺市立平中学校 3年 |
| 山下 桃代 | しなやかに、自然体 |
| 概要 | これまで、障がいをもつ方とどのように接し、どう考えると良いのか、人権という視点とともに悩む ことがありました。今年の春、車いすを使う後輩の入学をきっかけに、障がいをもつ方への接し方や考 え方について改めて見つめ直しました。誰と関わるときも、しなやかに、自然体で接することができれ ば、身近な場所からより良い社会を創ることができるのではないのでしょうか。 |

| | |
|--------------|---|
| さかもと おうか | 南砺市立平中学校 2年 |
| 坂本 桜香 | 自分自身と向き合う |
| 概要 | クロスカントリースキー競技と向き合う中で、様々な方との出会いを通じて感じた“競技力”向上の ための“人間力”向上。「謙虚・礼節・文武両道」の3つの観点から自分自身を見つめ直し、弱い自分 からも決して逃げることなく向き合いました。向き合うことで見つけた新たな目標へ向かってこれから も3つの合い言葉を胸に自分自身と向き合い続けていきたいと思いました。 |

第47回「中学生の主張富山県大会」開催要綱

1. 趣 旨
少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、他者を思いやる心を持ち、社会的に自立する、健やかな成長が求められます。
そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力を身に付けることが大切です。
中学生の主張富山県大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施するものです。
2. 開催日時 令和7年8月8日（金） 10時～12時30分
3. 開催場所 パレブラン高志会館 カルチャーホール
〒930-0018 富山市千歳町1-3-1
4. 対 象 県内の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。
※国籍は問わないが、日本語で発表できること。
なお、作品は未発表、自作のものに限ります。
5. 主 催 富山県、富山県教育委員会、青少年育成富山県民会議
独立行政法人国立青少年教育振興機構
6. 後 援 富山県中学校長会、富山県PTA連合会
7. 主張発表者（出場者）・発表内容
(1) 主張発表者 第47回「中学生の主張富山県大会」主張文募集要領により応募のあった作品の中から作文審査で選ばれた10名程度による発表を行う。
(2) 発表内容
ア. 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
イ. 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
ウ. テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。
上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、中学生らしい自由にユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。
(3) 発表時間 5分程度（400字詰原稿用紙 4枚程度）
8. 表 彰 最優秀賞、審査委員特別賞、優秀賞を審査で決定し表彰します。
9. その他 最優秀賞受賞者は、「第47回少年の主張全国大会～わたしの主張2025～」(主催：国立青少年教育振興機構)の発表候補者に推薦する。審査を経て全国大会発表者として選ばれた場合は、11月16日（日）に東京で開催予定の「第47回少年の主張全国大会～わたしの主張2025～」で発表する。

第47回「中学生の主張富山県大会」主張文募集要領

1. 趣 旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、他者を思いやる心を持ち、社会的に自立する、健やかな成長が求められます。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力を身に付けることが大切です。

中学生の主張富山県大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施するものです。
- 2 主 催 富山県、富山県教育委員会、青少年育成富山県民会議
独立行政法人国立青少年教育振興機構
- 3 対 象 県内の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。
※国籍は問わないが、日本語で発表できること。
なお、作品は未発表、自作のものに限ります。
- 4 応募方法
 - (1) 発表内容
 - ア. 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
 - イ. 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
 - ウ. テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、中学生らしい自由にユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

なお、作品は未発表、自作のものに限ることとすることから、主張作文の執筆時には、生成AIを利用してはならないことを指導するよう、生徒の指導にあたる者に対して徹底すること。推敲時も同様であることを徹底すること。
 - (2) 縦書き 400字詰A4原稿用紙4枚程度にまとめる。（発表時間にして5分程度）
※自筆の原稿とし、5分を大幅に超えない分量とする。
 - (3) 原稿の書き方
 - ・ 1行目…タイトル
 - ・ 2行目…富山県 学校名 学年
 - ・ 3行目…氏名（ふりがな）
 - ・ 4行目…本文

※その他、正しい原稿用紙の使い方に留意する。
 - (4) 作品の著作権（著作権法第27条及び第28条に規定する権利を含む）は主催者に帰属するものとし、応募作品は原則として返却しません。

5 推薦

- (1) 各中学校は、応募者の中から優秀な作品**3点程度**選考し、推薦作品氏名一覧表及び学年別全応募者数（様式3）を添付し、市町村教育委員会に推薦する。

[5月23日(金)まで]

特別支援学校、富山大学教育学部附属中学校及び片山学園中学校は、同様に富山県こども未来課に推薦する。**[5月23日(金)まで]**

- (2) 市町村教育委員会においては、各中学校からの推薦作品をとりまとめのうえ、優秀な作品を**10点程度**選考し、推薦作品氏名一覧表（様式1）及び全応募作品数（様式2）を添付し、富山県こども未来課に推薦する。様式1、2については、データでも提出する。**[5月30日(金)まで]**

6 審査

- (1) 作文審査

- ・ 学校長及び市町村教育委員会から推薦を受けた作品の中から、作文審査により、入賞作品を10点程度選考する。

◇ 審査の観点

- ① 鋭い感性で、新鮮な主張であるか（中学生らしさ）
- ② 自分の考えを自分自身の言葉で表現しているか
- ③ 個人の体験に基づき、社会に訴える主張であるか
- ④ 提案や提言を実践しようとする意欲が感じられるか
- ⑤ 論旨が一貫していて分かりやすいか
- ⑥ 内容に共感・感動できるか

- ・ 入賞作品については、7月中旬までに、市町村教育長、中学校長あてに通知する。

- (2) 発表審査

令和7年8月8日（金）にパレブラン高志会館で開催する県大会において、作文審査により入賞した作品の中から、発表審査により最優秀作品を選考する。

7 その他

- (1) 作文審査で入賞した作品は、学校名・学年・氏名・題名・作品の内容を公表するとともに、発表者の顔写真・大会風景写真と併せて、「中学生の主張富山県大会発表文集」（令和8年1月頃発刊予定）、富山県のホームページ、青少年育成富山県民会議の広報資料等に使用する。
- (2) 最優秀賞受賞者を、「第47回少年の主張全国大会～わたしの主張2025～」（主催：国立青少年教育振興機構）の発表候補者として推薦する。審査を経て全国大会発表者として選ばれた場合は、令和7年11月16日（日）に東京で開催予定の「第47回少年の主張全国大会～わたしの主張2025～」で発表する。

審 査 委 員

第47回「中学生の主張富山県大会」に係る審査委員

【一次審査委員】（書類審査）

| | |
|-------|-------|
| 元中学校長 | 大沢 幸子 |
| 元小学校長 | 浦林 郁子 |
| 元中学校長 | 社浦 淳子 |
| 元小学校長 | 野中 明 |

【県大会審査委員】（発表審査）

| | |
|---------------------------|-------|
| 富山新聞社 副代表報道局長（審査委員長） | 宮本 南吉 |
| NHK富山放送局 コンテンツセンター長 | 中村 夏樹 |
| 北日本新聞社 編集局 生活文化部長 | 楠 浩介 |
| 元富山国際大学 子ども育成学部 教授 | 仲井 文之 |
| 富山県教育委員会 生涯学習・文化財課 社会教育主事 | 大坪 辰典 |
| 富山県教育委員会 教育みらい室 指導主事 | 河崎 泰子 |
| 青少年育成富山県民会議 副会長 | 廣田 勉 |
| 富山県厚生部 こども未来課 課長 | 澁川さおり |

第47回「中学生の主張富山県大会」発表文集

※ 主張文の転載等をご希望の場合は下記までご連絡ください。

編集・発行 青少年育成富山県民会議
(富山県厚生部こども家庭室こども未来課内)
住所 〒930-8501 富山市新総曲輪1番7号
電話 076-444-3136

毎月第3日曜日は
とやま県民家庭の日



「とやま県民家庭の日」から始まる1週間は

とやま家族ふれあいウィーク

～ 伸びよう伸ばそう青少年 ～